【ねがいましては】

平成２９年２月２４日　　*KYOWA SCHOOL*
第３１６号

「ある日の投書」

　ある日の新聞内の投書欄、中学３年生からの投書が載っていました。「宿題より読書時間ほしい」という題名で書かれた内容をご紹介いたします。

　私は読書が好きだ。だが、中学生になり、思う存分読書を楽しめるのは長期休みの間だけになった。今回の冬休みは宿題が多く、読書が出来なかった。宿題が学力向上を手助けする目的であることは理解できる。先輩によると、高校ではさらに、宿題が増えるそうだ。学校では、「自由には責任が伴う」と教えられる。ならば、義務教育ではない高校において、宿題はいらないのではないだろうか。どれほど勉強するかは個人の自由のはずだ。宿題は受け身の勉強である。それに追われて、じぶんのやりたいことを諦めていたら、命令されたことをこなすロボットと変わらないと思う。宿題をなくせまでとは言わない。ただ、せめて、高校では、長期休みの間の宿題を減らしてもいいではないか。

　スマホの普及によって、子どもたちの読書離れが進み、ＯＥＣＤの学力調査では、１５才の読解力が４位から８位に順位を下げたそうです。今の中学２年生たちが大学受験をするときから、記述式問題に大転換されるそうです。ある大企業では、あまりにも新入社員たちの読解力が低いので、入社してから３年間は、毎月読書感想文の提出義務づけをしているそうです。

　読書離れが大きな要因として叫ばれている中、この投書のように読書が好きな中学生もいるのですね。

　世の中、成績優秀なお子さんを望まれる保護者の方々が多いと思います。百歩譲って、悪いより良い方が・・・。の方々を含めればほとんどだと思います。

　地元中学校の定期テストも終わり、高校入試も終盤を迎え、勉強に対するチャレンジの季節が終わろうとしています。高校ではこれからが定期テストです。

　言えること、『テストが終わればやらない』

　私は学びとはそんなものなのかと寂しさを覚えます。定期テストが近づく約２週間前になると、各中学校ではテスト範囲表が配られ始めます。捉え方によっては、「勉強は２週間前から始めれば良いのだよ。」と聞こえるような気にもなります。「それまでは部活動に専念しなさい。」と言われているようにも聞こえます。現に定期テストが終わった日から部活動は再開されます。子どもたちはゆっくりと、のんびりとした時間を過ごす余裕はありません。先ほどの投書のように、読書がしたい中学生にとっては、たまらないでしょう。

　今の子どもたちの感覚は、ほとんどが勉強はつまらないものしての認識が当たり前のようです。テストがあるから勉強する。成績があるから勉強する。入試があるから勉強する。お母さんに叱られるから勉強する。

　だから終われば遊ぶ。

　何か寂しい・・・その理由・・・子どもたちは成長します。成長しようという勢いが子どもらしさを醸し出します。ですから、生きようという勢いが失われたとき、子どもらしさが見られない状態になります。

　宿題が終われば、他はやらない。結局学校側は、毎日の学習習慣をつけさせようと宿題を出します。塾に行っても宿題が出ます。では宿題を取り去ります。「やったー」と言って何もやらない・・・。だから休む間もなく宿題を出す。悪循環の何者でもありません。小学校入学時からその生活が当たり前になっていれば、その悪循環にも気づくこともありません。「今までの先生は宿題を出してくれたのに、今の先生は出してくれない、だからうちの子はさっぱり勉強をしなくなった。」そのような感情を抱かれた保護者の方々は多いと思います。

　悪循環にお気づきになっていないだけです。

　大切なのは、子ども自身が自らの意思で歩もうとしているか・・・。その生きようとする意欲を育てることが真の教育であり、学びではないのか・・・。

　ある日、ある生徒（中学生）が申し出ました。「私、英語が苦手なので英単語帳を作りたいのです。」自らが自らを見つめた結果の判断、そして自らの意思で申し出た・・。現在は英語が最悪の状態とのこと。この一歩の意思表示が生きることではないでしょうか。ほとんどのお子さんが、勉強しろって言われていないからやらない。宿題がないからやらない。となってしまっている中、この子は「１００点」の生き方をしようとしています。

　先ほどの投書の中学生も、「１００点」ではないでしょうか。自分の好きな読書がしたい。だからせめて高校へ行ってからは自由にさせてほしい・・・。なんと謙虚なことか。

　私なら、「今日、精一杯にやってみたいことがあったら、やってみよう。今日、本気で取り組んでみたい勉強があったらやってみよう、応援します。」そう宣言したいのです。そんな学校を創ってみたいのです。